

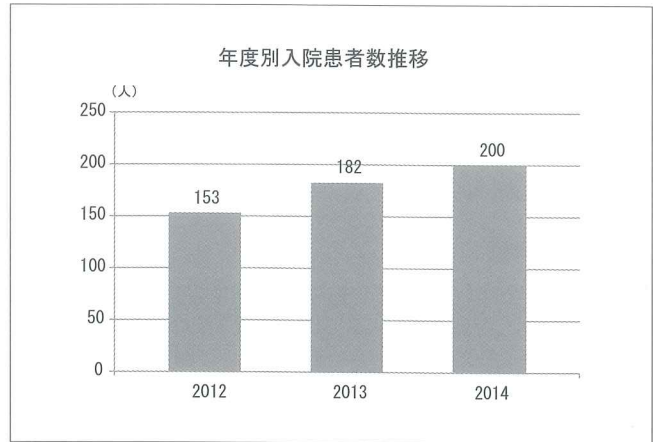
2014年度は、5月以降常勤として神経内科医師が赴任したため、入院患者は神経内科にて受け持つという体制になった。ただ、一部のめまいや脳血管障害の患者に関しては、状況次第で他科医師の応援を受けた。外来は、脳神経外科（藤岡）、神経内科（原）がそれぞれ週2回担当した。

入院については、脳疾患患者総数は200名であった（図1）。内訳は脳血管障害（脳梗塞・TIA、脳出血、くも膜下出血）125名（62.5%）、頭部外傷関連（外傷性くも膜下出血、外傷性脳出血、急性硬膜下出血、慢性硬膜下出血、脳挫傷）28名（14.0%）、めまい23名（11.5%）、てんかん・症候性てんかん8名（4.0%）、脳腫瘍4名（2.0%）、その他（パーキンソン病、神経調節性失神、片頭痛、Fisher症候群）7名（3.5%）であった（図2）。なお、脳血管障害患者には、他院からのリハビリ目的での転院も含まれる。前年度までと集計方法がやや異なるので単純比較はできないものの、全体として患者数はやや増加、脳血管障害とその他疾患の比率には大きな変化はなかった。脳血管障害の内訳は、脳梗塞・TIAが97名と全体の8割近くを占めた。急性期診療においては、これまで他院に搬送していたような発症後間もない脳梗塞・脳出血患者も極力当院で治療を開始し、また回復期診療においては、三角・大矢野地域だけではなく天草方面からも当院回復期リハビリテーション病棟への転院を勧め、患者の確保に努めた。また今年度は、院内で可能な脳外科手術を積極的に再開する方針とし、8月に慢性硬膜下血腫に対して穿頭血腫除去術、10月に正常圧水頭症に対してLPシャント術を、それぞれ済生会熊本病院から脳神経外科医師を招いて実施した。

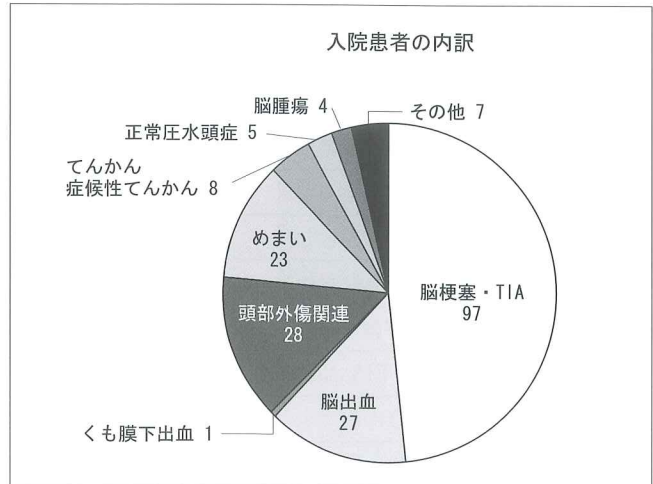
一方、外来については、脳神経外科・神経内科合わせて延外来患者数は2,645人であった（図3）。前年度より増加しているが、これは外来回数が増えた影響と思われる。内訳は脳血管障害、パーキンソン病などが多数を占めた。

三角・大矢野地域の高齢化に伴い、脳神経疾患においても患者の高齢化が目立っている。脳疾患は、脳血管障害、認知症、パーキンソン病など加齢がリスクとなる疾患が多く、今後も患者数は現状維持あるいは増加していくことが見込まれる。さらに当地域では近隣に脳疾患専門医が不在である。そのため、専門医が在住し、頭部MRIなど各種検査が迅速に施行でき、またリハビリテーションが充実している当院の果たす役割は非常に大きいと考えられる。今後も地域住民の需要に応えるべく、さらなる治療成績の向上を図りたい。

（図1）



（図2）



（図3）

